

デフォルメされたイラストから生ずる視覚的イメージの変容に関する基礎的研究

○伏木宏奈 (東洋英和女学院大学大学院)

久保田まり (東洋英和女学院大学)

【目 的】

本研究は、子ども達が豊かな表現力を持つためには内的なイメージを意図的に変容させていく力が必要だと考え、第1段階として、本当に本来持っていた視覚的イメージが変容してしまうのかどうかを調査していく。視覚イメージが、実際に見た視覚的な刺激によって変容してしまう可能性がある。そこで、実験により、生物の絵を描いてもらう実験を行う。実験協力者が絵を描くときに、デフォルメされた絵を見た記憶にひきずられることなく、自分の持っているイメージそのままを描けるのかどうかを検討する。

【方 法】

実験協力者 18歳から24歳までの大学生、大学院生48名 (男性24名、女性24名)。

手続き 実験参加者を「写真のみ群」、「写真→イラスト群」、「イラスト→写真群」の3群に分け、「イラスト→写真群」に対してのみ、先にデフォルメされた生物のイラストを見せる。その後、全ての群に対し生物の写真を提示し、その場で写真を見ながら生物を描いてもらう。描く時間は30分であるが、描き終えたらその場で終了する。終了後、1群 (写真のみ群) は何も見せず、「写真→イラスト群」に対してデフォルメされた動物・植物の絵を提示する。数日後、両群に対し再生テストを行う。この3群を知っている生物 (猫) と知らない生物 (オオグチボヤ) で行う。

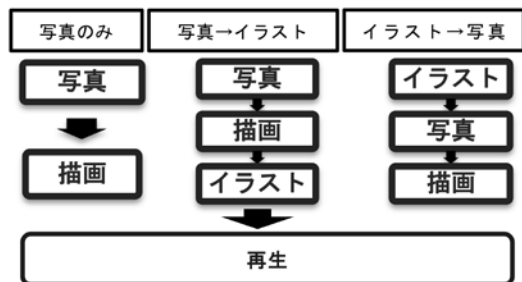


Figure 1 実験概略図



Figure 2 実験で使用する生物イラスト

【結果と考察】

再生前と再生後で絵が変化したと思われる以下の項目を、t検定と χ^2 乗検定により比較した。

Table 1 描かれた絵の分析項目

猫の分析項目	耳の角度
	ヒゲの本数
	影の多さ
	足先のマタ
	首の有無
	黒目の割合
オオグチボヤの分析項目	頭の丸み
	影の多さ
	頭のひらひらの有無
	胴体のくびれ

普段なじみのある生物の猫と、なじみのない生物のボヤを題材にして実験を行った。結果、猫はイラストによる影響が見受けられ、ヒゲの本数や足の三つ又が減った。このことから、既存の知識が有る場合でも、イラストによって影響されてしまうことがわかった。オオグチボヤの頭の丸み、ひらひらの有無の分析については、イラストを先に見るイラスト→写真群が顕著に引きずられる結果となった。また、猫のヒゲの本数の結果では、数字があまり変化せず有意差は出なかったが、イラストの本数に一番近い数字であった。そのため、最初からイラストの影響を受けていた可能性がある。これらの結果から、写真よりも先にイラストを見ることで、無意識的に固定化されたイメージが形成され、そのイメージの固定化が促進されてしまう可能性が示唆された。